

つどい

青森県偕行会念願の花見

青森偕行会長 稲村孝司 陸自75

青森県偕行会は、14日に開花し19日に満開を迎えた染井吉野に合わせ、例年より1週間早く4月20日、旧弘前偕行社庭園において桜花の下で、紅白幕を張った花見を初めて実現できた。令和元年から計画はしたものの、同年は紅白幕を張った後に天気予報になかった雨が降り出し、急遽施設内の小集会所に場所を変更して行った。令和2年にはコロナ感染症防止対策から、大講堂で大テーブルに1人という花見だった。令和3年と4年は天気予報が降雨となり、始めから小集会所で間隔を狭めて行った。昨年は、降雨の心配がなく午後零時半から「花見」を開始した。開始したものの約30分後には強風となり、紅白幕がバタバタと揺れ、折り詰め弁当やコップが飛ばされ、会話も出来ず急遽施設内の小集会所に場所を変更して行った。

今年、降雨の心配がなかったものの、弘前公園の桜祭りが例年よりも1週間前倒し開催となり、桜も満開を迎えたことから全国からの観光客が多く、旧弘前偕

行社の見学にも大型観光団の予約が入り、同庭園の利用も午後2時迄となり、開始時間を午前11時とした。

当日、午前8時から偕行社職員2人の協力を得て会場を作り、10時には紅白幕を張り終え準備が整った。

参加者は、青森5連隊の記念日と重なるなどから青森市から2名のみで、津軽地方の13名、計15名となった。喜ばしい事に偕行会行事に初めて越野修三（陸自73）、田中幸史（陸自75）、永井達雄（陸自98）の3名が参加した。

昨年同様弘前駐屯地司令は、翌日弘前駐屯地創立56周年記念日を控えていたことから案内しなかった。また、弘前市防衛協会会長工藤武重氏も、翌日の記念日において重責があったことから案内しなかった。

終了時間に制限があることから、約半数が揃った10時40分に乾杯で花見の宴を開始した。最後に到着した参加者は青森からJR奥羽線利用で、花見客で列車が混雑し弘前駅到着が遅れたとのことだった。全員揃ったところで、先ず集合写真撮影となった。「青森県偕行会」の横幕と「会旗」を前に広げ撮った。桜花下の6年越しの念願が叶った。その後お花見弁当でビール、銘酒等を飲みながらの懇談が続いた。特に、三上知彦（陸自77）差し入れのタラの芽の天ぶらが初物として人気を博した。

近況報告では、初参加の3名は定年後の歩みを、例年参加者は昨年からの変化等が報告され、約2時間の会食懇談を終えた。終了前に、「陸修偕行社広報パンフレット（カラーコピー）」「朝雲新聞（令和6年3月15日発行）」及び「修親4月号（令和4月1日発行）」を説明し、陸修偕行社の発足に伴う県陸修偕行会の今後の在り方を話し合った。

2時間に及んだ花見は、秋の総会での再会を期して旧弘前偕行社を後にした。

なお、翌日の弘前駐屯地創立56周年記念行事も市民約2500人が訪れ、観閲行進や模擬演習を楽しんだ。

